

石垣の中の博物館

姫路城の記録から



写真1

仙台城石垣の調査は既報の通り、画期的な調査である。これだけ大規模な解体調査は、実は仙台城だけの話ではなく、姫路城でもそれ以上の解体修理が実施されていた。姫路城最大の規模を誇る帯の櫓下の高石垣である。

この調査は、昭和27～28年にかけて行われた。石垣の歪みが原因で帯曲輪の建物が傷んだため、建物の修理の一環として実施されたのである（この調査に関しては、『国宝・重要文化財姫路城建造物保存修理工事報告書Ⅰ』に概略が記されている）。報告書によると、石垣内部はすべて盛土であり、砂質土と粘質土を交互に盛っていたという。その状況は、写真2を見るとわかる。

また、修理前の石垣は、最大で1.3mも孕みだ出していたが、盛土にはなんら影響は見られず比較的しっかりしており、円礫の栗石が孕みの原因と指摘されている。そのためこの修理では、栗石を円礫から碎石に取替えるのがよく、盛土は基本的にそのままの状態にしたとされる。そのため、仙台城のように、石垣を支える地山まで調査のメスは入らなかった（もっとも当時は、発掘調査の対象・方法も確立していなかったという歴史的な事情もあった）。

しかしそうした状況でも、当時の工事関係者はいくつかの記録を残してくれている。報告書の記述もその一つである。

遠い将来、姫路城で未修理の石垣が修理を必要としたとき、これらの記録は貴重な資料となるに違いないのである。

写真1；修理にあたり、隅部に据えられた根石。永年の重みで土台石がズレており、孕みの一因となっていた。報告書では土台石の下にコンクリート版基礎を置くのが適当としている。実際には大きな根石にしたのだろうか。



写真2；積石の解体状況

盛土が層状になっているのがわかる（縞模様になっている）。

ボーリング調査の結果、盛土内部には姫山の岩盤がおよんでいないことが判明している。つまり、姫山の地形に規定された曲輪ではない。近世城郭における高石垣技術の導入は、自由な曲輪配置を実現させたとされる。姫路城では、大規模に盛土を施してまでこの場所に曲輪を造成する意味があったということになる。その意味とは何であろうか。興味はつきない。

全体が盛土となると、雨水対策が不可欠となる。高石垣上部に建物を置くのは、石垣内部への雨水の浸透を最小限にする工夫でもあった。帯の櫓に数寄屋が増築された理由も、石垣のメンテナンスと関係があるのかもしれない。



写真3；盛土から出土した捨石

写真を見るとこうした捨石が盛土から顔をのぞかせている。

また、円礫層が盛土内に散見される。基本的に砂質土と粘質土が層状に盛られているが、ところどころで円礫層もあったようだ。

これらは、仙台城で発掘された「階段状石垣」や「面暗渠」に相当する機能をもった構造物とは考えられないだろうか。

写真1で人物の背後に「千姫羊羹」の看板が見えます。どんな味の羊羹だったのでしょうか。これも興味深いです。

